

令和6年度 研究紀要 第244号

《 研究主題 》

一人一人の子供を主語にする 授業づくり ～1年次～

- (1) 「一人一人の子供を主語にする授業」とは
- (2) 教師主導から子供主体の授業へ～授業改革の具体
- (3) 教師に求められる資質・能力



胆振教育研究所



子供が主体的に学ぶ授業への転換

胆振教育研究所 所長 佐藤 淳
(伊達市立東小学校 校長)

「個別最適な学び」「協働的な学び」、そして「一人一人の子供を主語にした学び」——。中教審が答申した『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～』は早くも4年が経過しました。現在、各学校で授業改革が進められていますが、実践はまだ浅く、教師たちはどのように指導すればよいのか、どのように子供の学びに寄り添うべきかを手探りで進めているのが現状です。

本研究所は、そんな胆振の先生方の悩みにいち早く応えるべく、理論研究に取り組んでいます。昨年度までの3年間は、「個別最適な学びと協働的な学びの実現に向けた授業づくり」に焦点を当てた研究に取り組んできました。個別最適な学びと協働的な学びがどのような学びであるか、各教科における授業改善のポイントは何かについて研究を進め、3年目の昨年度に、胆振管内の学校でICTを効果的に活用した授業実践や、授業と家庭学習の連動を図った実践を紹介し、まとめました。

そこで今年度は、残された課題である「教師が教える授業」から「児童生徒が自ら学ぶ授業」への転換を目指し、「一人一人の子供を主語にする授業づくり」を研究テーマに掲げ、理論研究を進めています。

教育の本質は子供の個性を尊重し、その成長を促進することにあります。しかし、これまでの画一的なカリキュラムや指導方法が、一人一人の子供に最適な学びを提供するうえで、障壁となっていたことは否定できません。だからこそ、「一人一人の子供を主語にする授業」を実現するためには、教師自身の意識の変革と実践力の向上が不可欠です。教師は、ただ知識を伝達するのではなく、子供たちの学びを導き、サポートする役割を担うことがこれからは大切になります。そのためには、ICTの効果的な活用、子供との関わり方、教材研究、学習環境の整備など、細部にわたる工夫が必要です。

今後の教育においては、ますます個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実が求められます。この研究紀要を通じて、実践的な知見が広まり、より多くの教育現場で「一人一人の子供を主語にする授業」が推進されることを期待しています。紀要の内容について、お気付きの点やご意見等がございましたら、どうぞ遠慮なくお知らせください。皆様の貴重なご意見が、本研究所の力となります。共に成長する研究所でありたいと考えておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

もくじ

巻頭言「子供が主体的に学ぶ授業への転換」 胆振教育研究所長 佐藤 淳

I 研究の構想

- 1 研究主題 1
- 2 研究主題設定の理由 1
- 3 研究内容 2
- 4 研究の全体構造 2

II 研究内容

- 1 「一人一人の子供を主語にする授業」とは
 - (1) なぜ今、一人一人の子供を主語にする授業が必要なのか 3
 - (2) 一人一人の子供を主語にする授業を実現するために
～キーワード解説 5
- 2 教師主導の授業から子供主体の学習へ～授業改革の具体
 - (1) 複線型授業とは 11
 - (2) 子供が「学ぶ」ための様々な方法 13
- 3 教師に求められる資質・能力
 - (1) これからの教師のあり方 18
 - (2) 学び続ける教師とは 18
 - (3) 主体的な学びを支援する伴走者へ 20

III 今後の方向性

- 今年度の研究を振り返って 21
- 参考資料、研究・執筆 22
- あとがき 23

I 研究の構想

1 研究主題

一人一人の子供を主語にする授業づくり

2 研究主題設定の理由

(1) 教育改革の動向より

Society5.0時代の到来、加速度を増す社会の変化など、複雑で予測困難な時代を迎えています。急激に変化する時代の中で、一人一人の子供が自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々が協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となるための資質・能力を育成することが、我が国の学校教育に求められています。

子供に必要な資質・能力を着実に育成するためには、現行学習指導要領にある「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改革が不可欠です。令和3年1月中央教育審議会答申『『令和の日本型学校教育』の構築を目指して』では、ICTを活用しながら、個に応じた指導を学習者視点から整理した概念である「個別最適な学び」と、「協働的な学び」の一体的な充実が、「主体的・対話的で深い学び」の実現につながると述べられています。

そのためには、私たち教員も意識を変革し、従前の「教師主導」「一斉指導」から「子供たちが学習の主体者」となる授業への転換を図ることが大切です。全ての子供たちの可能性を引き出す、「一人一人の子供を主語とする」授業づくりの推進が、今求められています。

(2) 研究所の研究から

令和3～5年度の本教育研究所の理論研究「個別最適な学びと協働的な学びの実現に向けた授業づくり」から、次のような課題が見えてきました。

- 今後も個別最適な学びと協働的な学びの実現を目指した授業づくりに向けて、胆振管内の共通認識を図るため、随時情報発信をしていく必要がある。
- 「教師が教える授業」から「児童生徒が自ら学ぶ授業」への転換を目指し、教師の意識の変革を呼びかけていく必要がある。

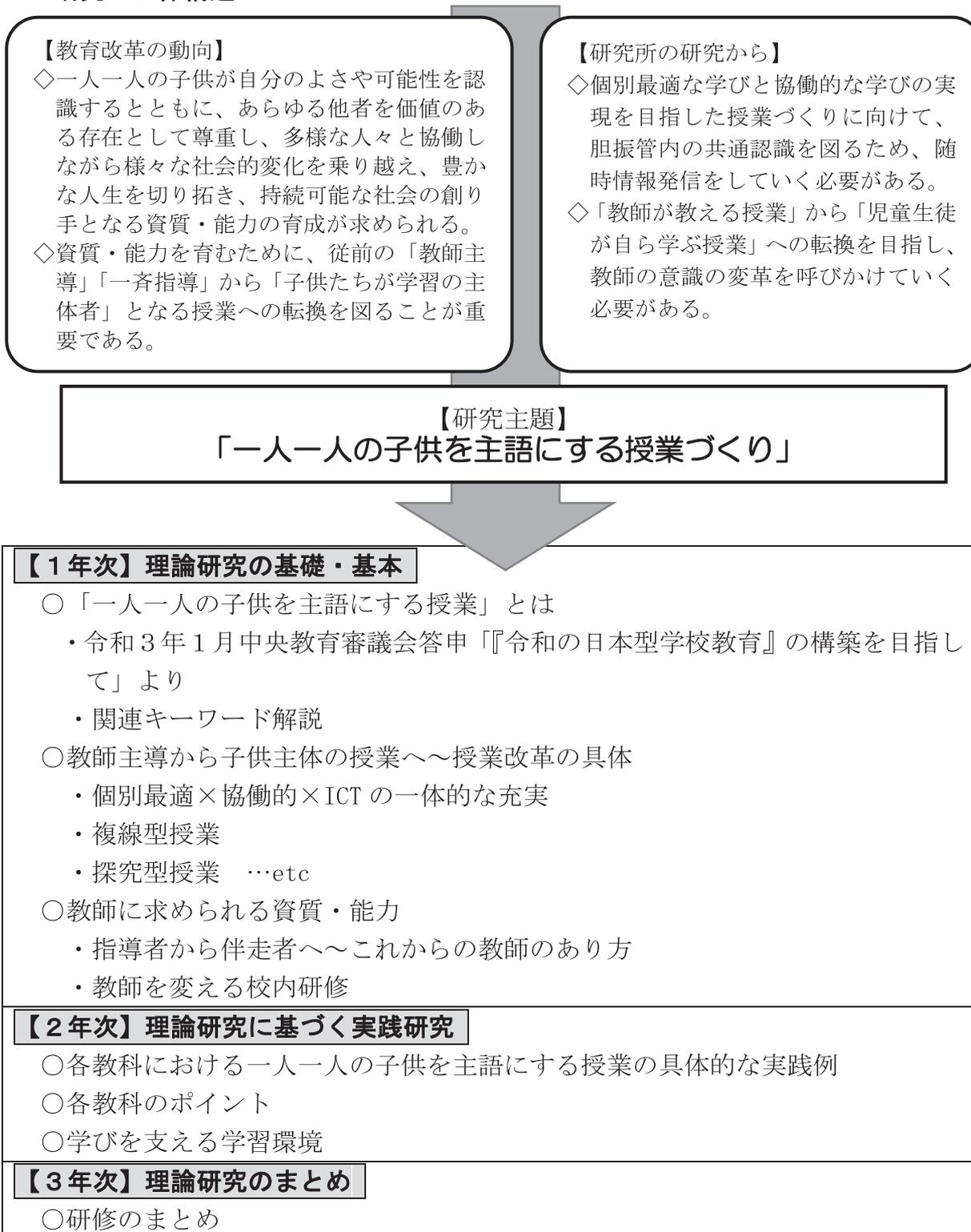
現行学習指導要領が施行されて数年が経ち、学習の主体を子供とする授業づくりについての理解は進んできているものの、実践については苦心している学校や先生が依然として多いように感じます。

胆振管内全ての学校において、一人一人の子供を主語とする授業の実現を目指し、先進的な実践や各学校での具体的な取組を交え、研究を深めていくことが大切だと考えます。

3 研究内容

- (1) 一人一人の子供を主語にする授業づくりとは
- (2) 一人一人の子供を主語にする授業の具体
- (3) 一人一人の子供を主語にする授業の実現を目指して

4 研究の全体構造



Ⅱ 研究内容

1 「一人一人の子供を主語にする授業」とは

(1)なぜ今、一人一人の子供を主語にする授業が必要なのか

令和3年1月中央教育審議会答申『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」に、「一人一人の子供を主語にした学び」という言葉が示されています。教育において、一人一人の子供を大切にするという理念は、今も昔も変わりません。では、「子供を主語にする」という言葉には、どのような意味が込められているのでしょうか。

学校が学習指導のみならず、生徒指導の面でも主要な役割を担い、様々な場面で子供たちの状況を総合的に把握して教師が指導を行うことで、子供たちの知・徳・体を一体的に育ててきたのが従来の日本型学校教育です。特に、授業における具体的な指導法としては、教師主導のもとで、大勢の子供たちに指導を行う「一斉指導」が代表として挙げられます。日本型学校教育の強みや成果としては、次の点が挙げられます。

- 対象となる全ての子供たちに、一定水準の教育を提供することができる。
(学習機会と学力の保障)
- 人間性を一面的な知識・技能に偏らせることなく、全面的、調和的に発展させることができる。(全人的な発達・成長の保障)
- 安心・安全につながるができる居場所・セーフティネットとしての役割 (身体的・精神的な健康の保障)

一方で、従来の日本型学校教育にはデメリットもあります。

- 「みんなと同じことができる」「言われたことを言われた通りにできる」ことを強く求めてきた結果、正解の比重が大きくなる。(正解主義)
- とりわけ学校においては、「みんなと同じことを、同じように」を過度に要求する場面が多く見られる。(同調圧力)

多様化が進んだ現代社会において、学校の画一的・同調主義的な風潮は、子供たちの生きづらさや不登校、いじめなどの問題の原因となっている側面もあります。また、教育を取り巻く現状として、他にも次のような課題が挙げられます。

- Society5.0時代や予測困難な時代の到来、社会全体のデジタル化・オンライン化など、社会は急激に変化している。
- 特別な教育的支援を必要とする児童生徒や外国人児童生徒の増加、貧困家庭の増加など、子供たちを取り巻く環境は多様化してきている。
- 児童生徒の学習意欲の低下、情報化の遅れ、少子化・人口減少の影響など、学校教育は新たな課題に直面している。

こうした、予測困難な社会の変化と、様々な課題に直面する中で、未来を生きる子供たちにはどのような力が必要になるのでしょうか。

現行学習指導要領前文では、これからの子供たちに必要な資質・能力について次のように示されています。

一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが必要

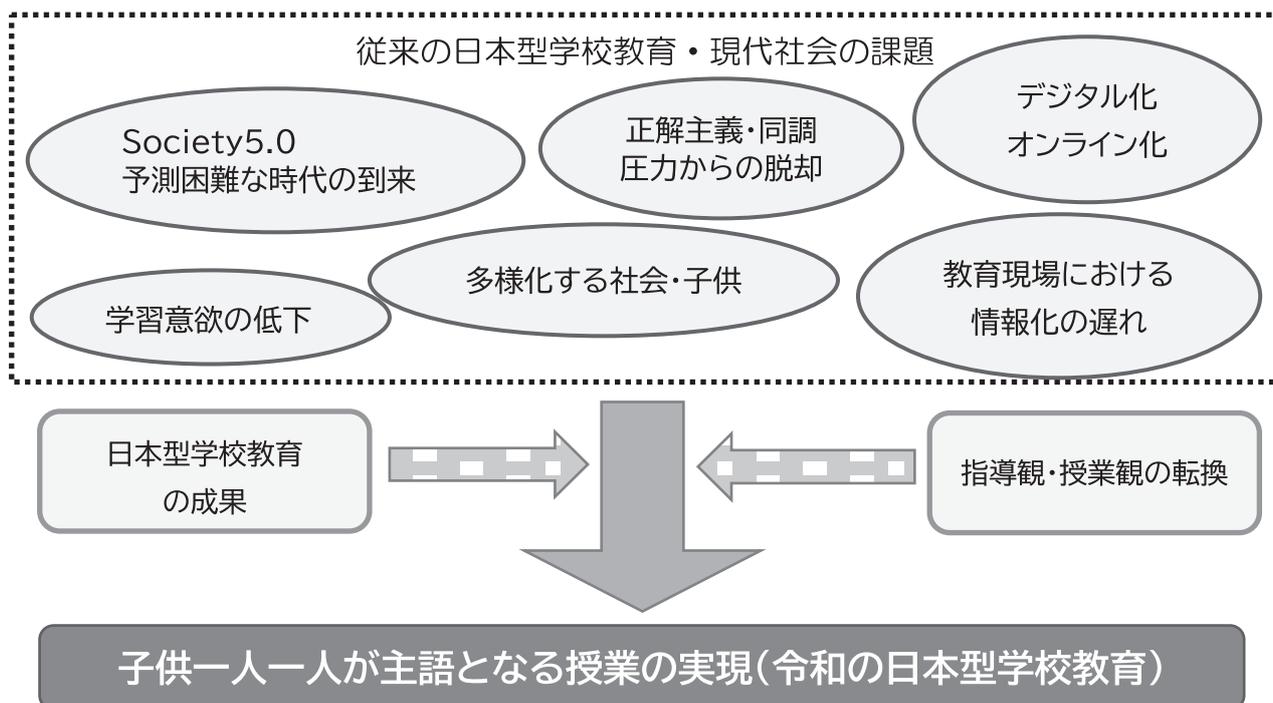
また、令和3年1月中央教育審議会答申『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」では、「令和の日本型学校教育」の姿として、「全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現」が示されています。

これからの子供たちに必要なのは「自立した学習者」として、多様な他者と協働しながら「正解」ではなく「最適解」「納得解」を求め続ける力です。

その資質・能力を育成するためには、従来の日本型学校教育、とりわけ教師主導による一斉指導のみでは限界があります。従来の教育の成果は生かしつつも、新たな指導観・授業観への転換が求められます。

- ・ 教師主導の授業から、子供が学びの主体となる授業へ
- ・ 教師が「教える」授業から、子供が「学ぶ」授業へ

指導者視点ではなく、学習者の視点で考える—これが、一人一人の子供を主語にするという意味であり、私達教師はそれを実現するための授業づくり、授業改革に努めていかなければなりません。



第4期教育振興基本計画における2つのコンセプト(持続可能な社会の創り手の育成、ウェルビーイングの向上)

令和5年6月16日に第4期教育振興基本計画が閣議決定されました。教育振興基本計画とは、政府が策定する教育に関する総合計画であり、今後5年間の国の教育政策全体の方向性や目標、施策などを定めています。本計画において2つのコンセプトが掲げられました。

①2040年以降の社会を見据えた持続可能な社会の創り手の育成

これからの教育では、将来の予測が困難な時代において、未来に向けて自らが社会の創り手となり、課題解決などを通じて、持続可能な社会を維持・発展させていく人材を育てることが求められます。

持続可能な社会の創り手を育む教育を ESD (Education for Sustainable Development) といいます。今、世界には気候変動、生物多様性の喪失、資源の枯渇、貧困の拡大等、人類の開発活動に起因する様々な問題があります。ESDとは、これらの現代社会の問題を自らの問題として主体的に捉え、身近なところから取り組むことで、問題解決に向けて必要な能力、態度を身に付けるための教育です。持続可能な社会づくりの構成概念、および必要な能力や態度は次の通りです。

構成概念

- 1 多様性 (いろいろある)
- 2 相互性 (関わりあっている)
- 3 有限性 (限りがある)
- 4 公平性 (一人一人大切に)
- 5 連携性 (力合わせて)
- 6 責任性 (責任をもって)

必要な資質・態度

- 1 批判的に考える力
- 2 未来像を予測して計画を立てる力
- 3 多面的・総合的に考える力
- 4 コミュニケーションを行う力
- 5 他者と協力する力
- 6 つながりを尊重する力
- 7 進んで参加する態度

ESDの実践にあたっては、問題解決的な学習を適切に位置付けるなど、探究的な学習過程を重視し、学習者を中心とした主体的な学びの機会を充実することや、体験や活動を取り入れることが大切です。また、ESDを効果的に推進していくためには、学校全体として組織的に取り組むこと、適切に指導計画に位置付けること、地域や大学・企業との連携の視点を取り入れること、児童生徒による発信と学習成果の振り返りを適切に行うことなどが重要です。

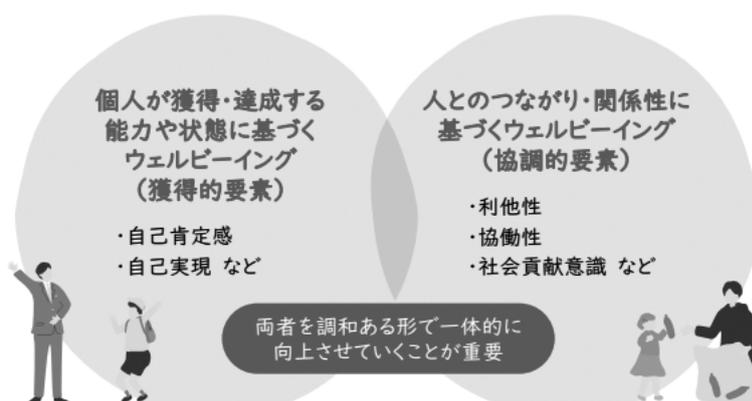
②日本社会に根差したウェルビーイングの向上

「ウェルビーイング (Well-being)」とは、well (よい) と being (状態) から構成される通り、身体的・精神的・社会的に良い状態にあることを意味し、将来にわたる持続的な幸福を含む概念となります。

良い状態とは、人生への幸福感や満足感、生きがいなど個人の主観で感じるものや、GDP (国内総生産) や生涯賃金、平均寿命など客観的な数値で把握できるものなど、捉えや感じ方は一人一人異なる多様なものです。近年、このウェルビーイングという言葉が頻繁に聞かれ、求められるようになったのは、数値で表せる物質的・経済的な豊かさだけでなく、精神的な豊かさを捉える考え方が重視されてきているためです。

不登校やいじめ、貧困など、コロナ禍や社会構造の変化を背景として子供たちの抱える困難が多様化・複雑化する中で、「調和と協調」によって一人一人のウェルビーイングを向上させ、よりよい、持続可能な社会づくりに主体として参画する人を育てる。これが教育によって求められる日本発・日本版のウェルビーイングです。

右図にあるウェルビーイングの要素は、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」をはじめ、教育活動全体を通じて向上させていく必要があります。そして、子供たちのウェルビーイングを高めるためには、「職場の心理的安全性」「保護者や地域との信頼関係」など、教師をはじめとする学校全体のウェルビーイングもまた重要となります。



※図～文部科学省「第4期教育振興基本計画」リーフレットより

子供たちのウェルビーイングを向上させる上で、子供一人一人を主語とする視点での授業づくりは非常に大切だと考えます。

教育 DX(デジタルトランスフォーメーション)

DXとは、Digital Transformation (デジタルトランスフォーメーション)の略語です。デジタル技術の活用によって、社会や生活、ビジネスモデルなどをよりよいものに変革することを意味します。教育DXとは、教育現場においてデータやデジタル技術の活用によって、学校教育の在り方や教育手法の変革を行うことです。具体的には、対面とオンラインによる授業のハイブリット化、デジタル教科書やデジタル教材による学習の効率化、CBTシステムによる作業負担の軽減などが挙げられます。

類語に「GIGA スクール構想」があります。2019年からスタートしたGIGA スクール構想は、すべての児童生徒が等しくICTによる教育を受けられるよう、児童生徒1人1台端末の整備や、それを利活用するためのクラウド環境の整備を主眼とする教育構想です。GIGA スクール構想の成果と課題を生かす形で、教育DXが推進されることとなりました。

2022年1月にデジタル庁・総務省・文部科学省・経済産業省共同で策定された、「教育データ利活用ロードマップ」が公表されました。ロードマップでは、教育のデジタル化のミッションとして「誰もが、いつでもどこからでも、誰とでも、自分らしく学べる社会」の実現が掲げられました。それぞれのキーワードについては、次のような内容が示されています。

- 誰もが、どこからでも…オンライン授業により、不登校や病気療養、災害などで登校できない児童生徒も学べる
- いつでも…前に戻れる・先に行ける、どこからでもどこまでも学べる
- 誰とでも…外部の専門家とつながる、同じ目標の仲間と学べる
- 自分らしく…特性に合わせて自分らしい学び方を選べる、興味関心を伸ばしてどんどん学べる、ワクワクを見つけられる

教育DXの目指す姿は、学習にまつわる様々な場・人・モノの組み合わせが広がり、学習者主体の教育が実現されることです。それはまさに、本理論研究の主題である「一人一人の子供を主語とする」に通じる姿であります。

個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実

現行学習指導要領や、中央教育審議会答申「令和の日本型学校教育の構築を目指して」では、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実が重要であると説明されています。

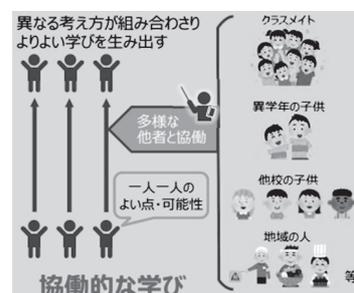
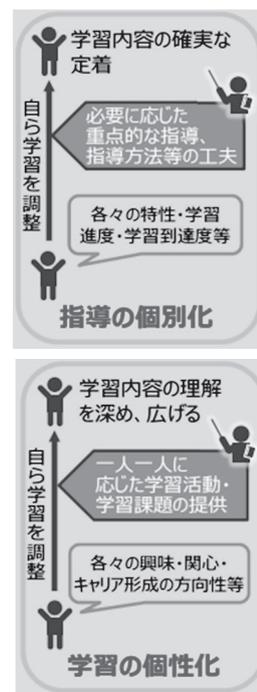
個別最適な学びは、「指導の個別化」と「学習の個性化」の2つに分けることができます。

「指導の個別化」とは、一定の目標の達成を目指す中で、児童生徒が自分に適した学び方、学ぶ内容を選択して学習を行うことです。教師も、児童生徒それぞれに合った学習の進め方を考え、多様な教材・時間・方法等の提供を工夫していきます。

「学習の個性化」とは、児童生徒の興味・関心等に応じた異なる目標に向けて、学習を深め、広げていくことです。その中で、児童生徒自身が自らどのような方向性で学習を進めていったらよいかを考えることも含まれます。教師は、児童生徒の学習が最適になるように、学習活動や学習課題を複数用意し、選択できるようにします。

指導の個別化と学習の個性化を教師視点から整理した概念が「個に応じた指導」であり、個に応じた指導を学習者視点から整理した概念が「個別最適な学び」となります。

協働的な学びとは、多様な他者を価値ある存在として尊重し、協働することでより良い考えや学びを生み出すことです。個別最適な学びが孤立した学びに陥らないように、また一人では学びきれないことを補うという側面もあります。



※図～文部科学省「令和の日本型学校教育」における学びのイメージより

一人一人の子供が主語となる授業づくりを実現する上で、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実は必要不可欠です。

本研究所においては、令和3年度から3年間、「個別最適な学びと協働的な学びの実現に向けた授業づくり」を主題とした研究を進めてまいりました。詳しくまとめておりますので、ぜひご覧ください。

胆振教育研究所 HP

<https://www.iburi-education.jp/category/bulletin/theory>



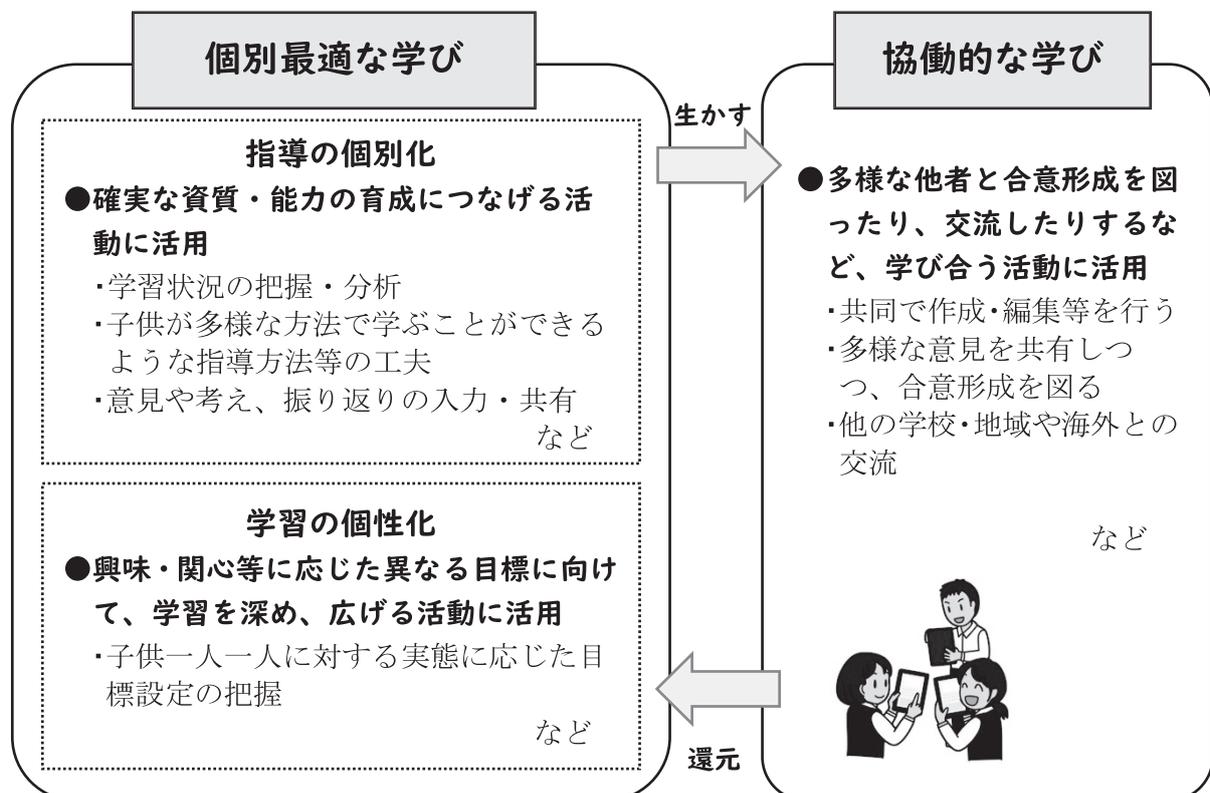
1人1台端末（ICT）の活用

個別最適な学びと協働的な学びを効果的に行うツールとなるのが、1人1台端末です。胆振管内の学校においても、導入されて4～5年が経過し、日常的な活用が定着してきているのではないかと思います。例えば、個別の知識・技能といった答えが一つの領域は、AIドリルや動画等による学習など、活用場面が容易に設定できます。一方、思考力・判断力・表現力等、高次の資質・能力の育成のためには、ICTの特性や強みを理解した上で、効果的に授業に取り入れていく必要があります。

平成28年に取りまとめられた『「2020年代に向けた教育の情報化に関する懇談会」最終まとめ』（文部科学省）によると、ICT活用の特性・強みは次の3点に整理されます。

- ①多様で大量の情報を収集、整理・分析、まとめ、表現することができ、カスタマイズが容易であること
- ②時間や空間を問わずに、音声・画像・データなどを蓄積・送受信でき、時間的・空間的制約を超えること
- ③距離に関わりなく相互に情報の発信・受信のやり取りができるという、双方向性を有すること

私たち教員は、ICTの特性や強みを理解した上で、授業内に適切に組み込むことにより、児童生徒の資質・能力を育成していく必要があります。



「ダイバーシティ」と「インクルージョン」

「ダイバーシティ (diversity)」という言葉が、教育を問わずに最近耳にすることが多くなりました。ダイバーシティとは「多様性」を意味する用語です。性別や年齢、国籍、人種、宗教、障がいの有無など個々に違いがあり、それを受け入れたり、認めたりしている状態を表しています。実際、これを読まれている皆さんの学校でも、前述した多様な子供たちが在籍している状況が増えてきているのではないのでしょうか。

これまでの日本型学校教育においては、集団性や規律が重んじられ、「みんなで同じことを、同じように」を要求する場面が多く見られました。学習機会の保障や、調和のとれた成長が見込める半面、多様化が進んだ現代社会において、学校の画一的・同調主義的な風潮は、子供たちの生きづらさや不登校、いじめなどの問題の原因となっている側面があります。こうした側面を解消する意味でも、子供が学びの主体となる授業を一層推進していく必要があります。

ダイバーシティという考え方を進めていく中で生まれたのが「インクルージョン (inclusion)」です。インクルージョンは「包含」「包摂」と訳されます。現在各学校で推進されているインクルーシブ教育は、障がいの有無にかかわらず子供が共に学ぶ仕組みのことです。

これからは、障がいの有無だけでなく、性的マイノリティ、外国にルーツがある、ヤングケアラーなど、多様な子供が存在することを前提として、すべての子供が学びに参加できる教育を実現していく必要があります。

多様で個性的な子供たちに、どのように教育を授けていくか。旧態依然とした一斉指導のみでは、対応は非常に困難です。子供が学びの主体となるような授業を適度に取り入れるなど、私たち教師側も多様な学習環境を整えていくことが大切です。

次章からは、教師主導から子供が学びの主体となる授業の実際について紹介していきます。

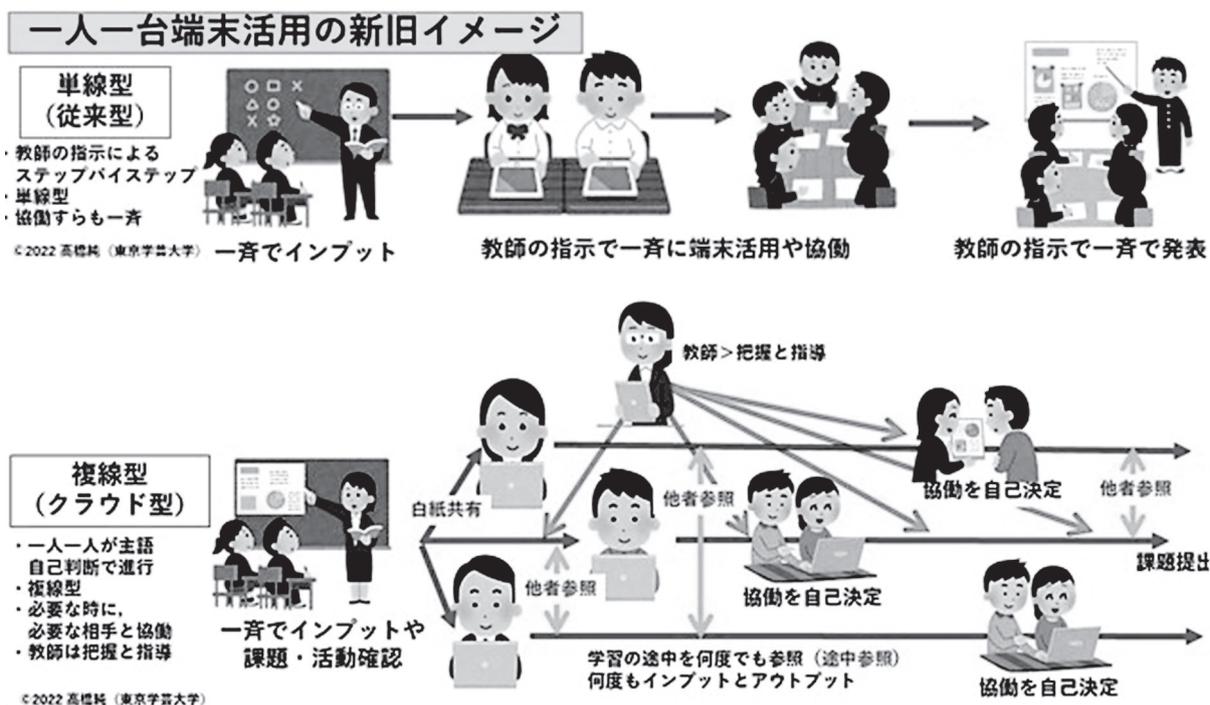
2 教師主導の授業から子供主体の学習へ～授業改革の具体

(1) 複線型授業とは

一人一人の子供を主語にする授業の形として、教師の新たな指導観・授業観の転換が必要であると述べてきました。新たな授業観とは、教師が「教える」授業から、子供が「学ぶ」授業への転換です。

子供が自ら学ぶ授業の形として、「複線化」「複線型（授業）」という方法があります。複線型の対義語は「単線型」です。単線型の授業とは、最初から最後まで教師の指示により授業が進められる、従来の一斉指導の形態です。

対して複線型の授業とは、児童生徒の興味関心や理解度に合わせて、複数の学習活動を同時に展開する形態です。様々なツールを活用して学習を進めたり、他者を参考にしたり、協働的な学習に取り組んだりするなど、一人一人が自己判断、自己決定を行い進んでいきます。教師はまず児童生徒の学習状況の把握に努め、必要に応じて指導を行ったり、適宜声をかけたりしていきます。まさに子供一人一人が主語となる授業形態となります。



※図～「GIGA スクール構想×クラウド活用」(文部科学省) (<https://www.mext.go.jp/studxstyle/special/49.html>) より

複線型の授業はこれまでも行われてきましたが、アナログが中心の時代においては、児童生徒の把握や評価といった部分が非常に困難でした。また、児童生徒目線で見ると、学習活動の選択肢や、他者との共有が限定的という課題がありました。

それらの問題を解決し、複線型授業の可能性を広げたのが1人1台端末です。児童生徒目線で見るとICT活用の強みについては、9ページでも述べたように、3つの点が挙げられます。

- ①多様で大量の情報を収集、整理・分析、まとめ、表現することができる。
- ②時間や空間を問わずに、音声・画像・データなどを蓄積・送受信できる。
- ③距離に関わりなく相互に情報の発信・受信のやり取りができる。

また、ICTの活用は、教師目線で見ると、学習状況の把握や学習ログの蓄積などで大きな役割を果たします。以上のことから、複線型の授業を行っていく上で、ICT端末の活用は大変有効と言えます。

子供一人一人を主語にした授業を展開していく上で、複線型授業は欠かせません。ただし、単線型授業をすべて否定するわけではありません。

例えば、全ての児童生徒に確実に身に付けさせたい内容を指導する際には、単線型の授業が適していることがあります（反対に、思考・判断・表現等を育成する学習においては、複線型の授業はより適していると言えます）。また、1時間の授業、または単元構成の中で、単線型と複線型の両方で授業を展開していくことも考えられます。

どちらか一方に限定することなく、単線型と複線型、それぞれの良さや効果を踏まえた上で、学習内容や単元構成に合わせ併用していくことが大切です。

さて、複線型を含め、最近様々な方法や形態を表す言葉を目にすることが増えてきました。次ページからはそれらについて解説をしていきます。ただし、これらの学習方法は今も全国各地で実践・研究が進められており、その定義は完全に確立されているわけではありません。様々な文献や資料を基にまとめた情報として提供いたしますので、今後子供を主語とする授業を展開していくための一つの視点として参考にいただければ幸いです。



(2) 子供が「学ぶ」ための様々な方法

自由進度学習

自由進度学習は、教師が計画する学習内容の枠内において、子供一人一人が課題を設定し、計画を立て、自分のペースで学習を進め、その過程で他者と相互に作用しながら学びを深めていくことを目指す学習スタイルです。中央教育審議会答申「令和の日本型学校教育の構築を目指して」においても、個別最適な学びを実現する手段として位置付けられています。

全国の小・中学校の様々な実践の中には、1 単元全て自由進度学習を行う「単元内自由進度学習」があります。単元内自由進度学習の流れは、一例として次のようになります。

段階	児童生徒の活動
①ガイダンス	<u>単元全体の目標や流れなどの見通しをもつ。</u> ⇒単元の最初に行います。単元の目標や時数、学習の流れ、学習材などを教師が提示することで、単元のゴールを理解させます。教師側からいうと、単元計画表を共有するイメージです。
②計画	<u>教師が用意する「学習の手引」を参考に自分で計画を立てる。</u> ⇒個別に課題を立てたり、いつ、誰と、どのような方法で、何をするかを決定したりします。
③追究	<u>問いに対して追究を進める。</u> ⇒追究過程においては、個で取り組む、協働して取り組む、多様な教材で取り組むなど、個の興味・関心やペースに対応した様々な方法や環境を整えます。教師は状況の把握に努め、必要に応じて指導やアドバイスをします。
④まとめ	<u>学習内容と学習方法を振り返る。</u> ⇒学習への理解度だけでなく、学習計画と実践した結果に対する振り返りを自分の言葉で行い、次の学習につなげることで、自己調整力が養われます。

こうした単元内自由進度学習を実現するために必要な手立てとして、次の3点が挙げられます。

- ①学習計画表の活用～毎時間ごとに個人の課題や振り返りを記入することで自己調整力を身に付けたり、困ったときに学習内容を確認したりするなど、個で進める学習において、学習計画表は必須となります。
- ②個への指導の工夫、充実～教師が児童生徒の進捗状況を把握し、個に応じた適切な支援が重要になります。複数の教師で対応するといった工夫も考えられます。
- ③環境整備～興味・関心に対応できる教材の準備や、多様な学習方法に対応できるスペース、ICT 環境の整備などが考えられます。

学習計画表の一例として、伊達市立伊達小学校5年生で使用しているものを次ページで紹介します。

※この項は、文部科学省『『令和の日本型学校教育』の構築を目指して』、小学館『小学校教員のための教育情報メディア『みんなの教育技術』』、教育新聞ホームページ等を参考に作成しました。

【学習計画表】

✓	ページ	学習内容	13/13	スキル	キュビナ	学習日	自分の課題	【学びのwhy】この単元を学習するのは、なぜ？ 【学びのhow】この単元を学習するのは、どのように？
		【単元のゴール】 ・分数の通分や約分の仕方を理解し、分母が異なる分数の足し算や引き算をすることができる。高としての分数や分数と小数・整数の関係、約倍か約分かで表すことについて理解することができる。 ・分母が異なる分数の足し算や引き算の計算の仕方を考えることができる。分数の意味についての理解を広げることができる。 ・学習に迷ったとき、振り返りを通して自分自身の学びに気づいたり、学んだことを生活や学習に活かそうとしたりしている。						①まとめ（今日の学習で分かったことを自分の言葉で）の振り返り（「算数のきまり」や「考え方」について大切だと思ったこと、これまでの学習と比べて、気づいたこと、さらにやってみたいこと・生活の中で使えると思ったこと等）
✓	P144 P145 P146	①等しい分数 等しい分数の作り方とその性質について理解する。	9/30	44 ステップ ① ステップ ②③	大きな 等しい分 数 (基本)	9月30日	①等しい分数 等しい分数の作り方とその性質について理解する。	等しい分数の作り方がわかった。分子と分母に同じ数をかけても割っても大きさは変わらないからそれを覚えると等しい分数はできると思った。教科書の問題は解けたけどキュビナの問題を家でやってきて確かめようと思った。
✓	P147	等しい分数の性質をもとに、約分の意味とその仕方について理解する。	10/2	44 ステップ ③④ ステップ ⑤	約分 (基本)	10/1	等しい分数の性質をもとに、約分の意味とその仕方について理解する。	約分する方法がわかった。自分は約分の方法があまりわからないから、友達に聞いたり先生に聞こうと思った。だから次の時間に約分の仕方を詳しく教えてもらおうと思う。
✓	P148	等しい分数の性質をもとに、通分の意味とその仕方について理解し、分母が異なる分数の大小比較ができる。		45	通分 (基本)	10月2日	等しい分数の性質をもとに、通分の意味とその仕方について理解し、分母が異なる分数の大小比較ができる。	通分するには公倍数を見つけて見つけることができる。だから公倍数ができてない通分もできないと思った。公倍数を見つけてその数で分子と分母をかけるとできる。約分も通分も理解できた。
✓	P149	通分の仕方について理解を深める。				10月3日	通分の仕方について理解を深める。	通分を完全に理解できた。この前は通分があまりわからなかったけど、家庭学習やキュビナをやっていたから通分を克服できた。約分は友だちに教えてもらってできるようになった。
✓	P120	②分数のたし算・ひき算 分母が異なる分数の、足し算や引き算の計算の仕方考え、理解することができる。		46	分数のたし算とひき算 (基本)	10月4日	②分数のたし算・ひき算 分母が異なる分数の、足し算や引き算の計算の仕方考え、理解することができる。	通分を使ってできる分数の足し算と引き算をできるようになった。分母を揃えたとあとは4年生のときと同じように、分子だけを足すと答えが求められる。
✓	P121	答えが約分できる場合や3つの場合の分母が異なる分数の足し算や引き算ができる。		47	分数のたし算とひき算 (標準)	10月7日	答えが約分できる場合や3つの場合の分母が異なる分数の足し算や引き算ができる。	答えを約分する分数のたし算ひき算ができるようになった。約分はこの前まで苦手だったけどゆまから教えてもらってわかるようになった。だから時間は少しかかるけど約分はできるようになった。素数は約分できないときもあるからそれを考えて約分できた。
✓	P122	帯分数どうしの足し算や引き算の仕方考え、理解することができる。		48	帯分数のたし算とひき算 (標準)	10月8日	帯分数どうしの足し算や引き算の仕方考え、理解することができる。	帯分数のたし算ひき算ができるようになった。自分ははるさんとえまさんとエマさんのやり方のほうがわかりやすかった。家庭学習で今日やった勉強をやろうと思う。
✓	P123	学習内容を確実に身につける。				10月9日	学習内容を確実に身につける。	分数のたし算ひき算の練習ができた。だけど計算が多すぎて全部終わらなかった。だから次の時間にやろうと思った。他の時間のときに終わってないものも何個もあったからその問題を次やろうと思う。約分も通分もできるようになったからあととはとにかく練習をしたい。

タブレット端末で管理しています。学習内容や教科書のページ、関連するドリル等を確認できます。毎時間、個人課題と振り返りを記入することで、自己調整力が身に付きま

【学習の手引】

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J
1	<p>【目的】</p> <p>・この学習方法の目的は、「自分にあった方法で、算数の力を身につけること」です。こうすることで、今までより、効率的に学習ができます。理解できたらどんどん先に進めていくこともできますし、わからないところはじっくり理解をしていくこともできます。方法はそれぞれですが、「算数の力を身につけること」はみんな同じです。「単元のゴール」を確かめながら、「学習内容」「コメント」を参考に取り組みましょう。</p> <p>・「もっとこうしたい」等の要望は、「ヘルプ」に書いておいてください。良い方法を先生も考えます。</p>									
2										
3	<p>【誰と】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1人で ・2・3人で集まって ・先生と <p>※途中でやり方を変えても、もちろんOK</p>			<p>【どうやって】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教科書で ・解説動画で ・先生に確認しながら ・友達に確認しながら <p>※「コメント」を参考に！</p>			<p>【チャレンジ】</p> <ul style="list-style-type: none"> ①もっと練習やキュビナで練習問題を解いてみる ②プリントで力試しをしてみる ④教科書やスキルを参考に問題を作って出し合ってみる ⑤次の課題に進んでみる ⑥困っている人に教える（シートで確認） 			

4	丸つけレベル
5	
6	
7	Lv.0...していない
8	
9	Lv.1...まちがえて丸つけている
10	
11	Lv.2...正しく丸つけている
12	
13	Lv.3...まちがいをなおしている
14	
15	Lv.4...なおしたら、ふんせきしている
	Lv.5...もういちどれんげししている。

学習の進め方を「学習の手引」という形で示しています。

加えて、身に付けさせたい力として、学びのスキル（丸の付け方）も示しています。

自己調整学習

自己調整学習とは、学習者が自分自身の学習に能動的に関わり、自らの学習を調整するという学習方法です。「自ら学ぶ力」を身に付けることを目的としています。

令和3年1月中央教育審議会答申『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」の中で、個別最適な学びについて次のような解説があります。

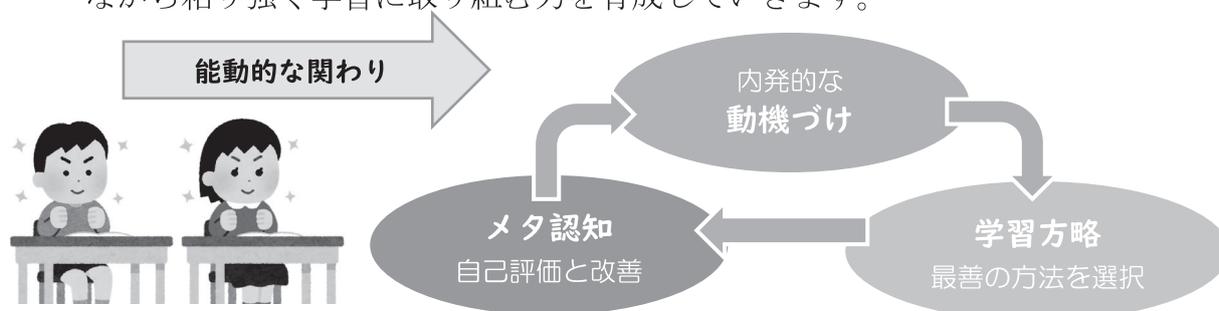
全ての子供に基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させ、思考力・判断力・表現力等や、自ら学習を調整しながら粘り強く学習に取り組む態度等を育成するためには、教師が支援の必要な子供により重点的な指導を行うことなどで効果的な指導を実現することや、子供一人一人の特性や学習進度、学習到達度等に応じ、指導方法・教材や学習時間等の柔軟な提供・設定を行うことなどの「指導の個別化」が必要である。

つまり、自己調整学習は、教師目線で見たと「指導の個別化」であり、個別最適な学びを実現するために重要な要素となります。

子供が能動的に自己調整学習に関わるために、必要な要素が3つあります。

- ①**動機づけ**～教師が提示する最初の教材や活動をきっかけに、子供が「調べたい」「はっきりさせたい」と内発的な動機づけが促され、主体的な学びに向かっていく状態を作ることが大切です。
- ②**学習方略**～どの子も同じ方法で学ぶのではなく、それぞれの子供が自己選択、自己決定した方法、自分に適した方法で学びを進められるようにします。子供が最善の方法を選択できるよう、教師は発達段階に応じた意図的・計画的な学習方法の指導が必要です。
- ③**メタ認知**～自分の学習状況を客観的に評価して課題を認識し、考え方や解決方法などの学びの方向性を調整し、改善につなげていきます。

この3要素をサイクルとして学習を展開していくことで、自ら学習を調整しながら粘り強く学習に取り組む力を育成していきます。



※この項は、小学館「小学校教員のための教育情報メディア『みんなの教育技術』」を参考に作成しました。

探究（型）学習

探究学習とは、日常生活や社会の中にある問題について課題を設定し、解決するために情報を収集・分析し、意見を交換したり協働したりしながら進める学習です。

「探究的な見方・考え方」を働かせて行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成します。

高校においては令和4年より、「総合的な学習の時間」が「総合的な探究の時間」に名称変更となるなど、探究学習は近年非常に注目を集めるとともに、重視されています。その背景には、グローバル化やデジタル化が進み、社会の変化が予測困難な時代の到来があります。あらかじめ決められた正解のないことや、複雑で簡単に答えが出ないことを課題に設定し、自分なりに考え、自分なりに問題を見出し、自分なりの答えを出す力の育成が必要です。

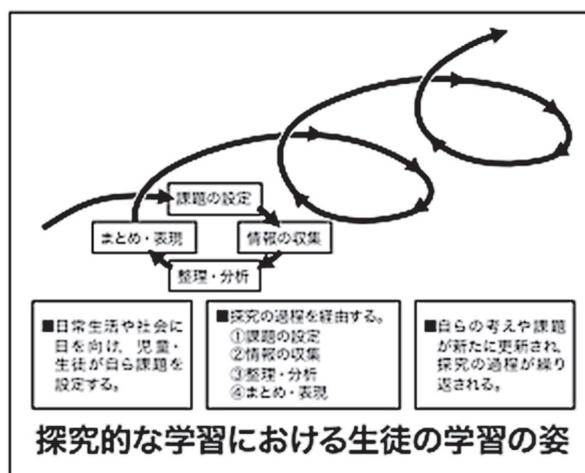
小・中学校段階においても総合的な学習の時間を核として、探究型の学習を重視し、一層推進していく必要があります。

探究学習には次の基本的な学習サイクルがあります。

- ①課題の設定～体験活動等を通して、課題を設定し課題意識をもつ
- ②情報の収集～必要な情報を取り出したり収集したりする。
- ③整理・分析～収集した情報を、整理したり分析したりして思考する。
- ④まとめ・表現～気づきや発見、自分の考えなどをまとめ、判断し、表現する。

このサイクルは、必ずしも順番通りに行う必要は無く、順番が前後したり、一つの活動の中に複数のプロセスが一体化して同時に行われたりすることもあります。

この学習過程を何度も繰り返すことで、「探究的な見方・考え方」を働かせて、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成します。



※図～「今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開」（文部科学省）より

※この項は、文部科学省「今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開」を参考に作成しました。

課題（問題）解決型学習

探究学習と類似する学習に、課題解決型学習があります。課題解決型学習は、PBL (Project Based Learning) とも言われます。子供自らが課題を見付け、その課題を解決する過程を通して、課題を解決するために必要な資質・能力（問題解決能力、思考力、主体性、コミュニケーション能力等）を身に付ける学習法です。正しい答えを導くことが重要ではなく、課題解決までの過程を重視しています。

課題解決型学習には決まった形式が無く、研究者・実践者によって多種多様であるものの、概ね次のような特徴があります。

- ・学習の流れは探究学習に類似する。（①問題や課題の設定→②情報収集→③整理と分析→④まとめ・表現 を繰り返す）
- ・課題は児童生徒自身が設定することが多い。
- ・チュートリアル型（教室など机上で学習を進めていく方法）と実践体験型（民間企業や地域などの現場に入って課題解決に取り組む方法）がある。

※この項は、上越教育大学「総合的な教師力向上のための調査研究事業実施報告書」、岡山県教育委員会ホームページ、教員人材センターホームページ等を参考に作成しました。

まとめ

ここまで述べてきた、授業の複線化に関する様々な学習方法についてまとめます。

	自由進度学習	自己調整学習	探究学習	課題解決型学習
概要	教師が計画する学習内容の枠内において、子供一人一人が課題を設定し、計画を立て、自分のペースで学習を進める。	学習者が自分自身の学習に能動的に関わり、自らの学習を調整するという学習。	生活や社会問題について課題を設定し、解決するために情報を収集・分析し、意見を交換したり協働したりしながら進める学習。	子供自ら課題を見付け、その課題を自ら解決する過程を通して、課題を解決するために必要な資質・能力を身に付ける学習。
ねらい	・ <u>主体的に学べる。</u> ・他者と相互に作用しながら <u>学びを深めていける。</u>	<u>自ら学んでいく力を身に付ける。</u>	<u>自己の生き方を考えていくための資質・能力を身に付ける。</u>	<u>課題を解決するために必要な資質・能力を身に付ける。</u>

子供たちに自ら学び続ける力や主体的に学ぶ力、必要な資質・能力等を育成する上で、これらの学習は非常に有効です。目の前の子供の実態、教科・領域、学習内容に合わせ、適切に選択し、活用して行ってください。

3 教師に求められる資質・能力

(1) これからの教師のあり方

教師主導の授業から、子供が学びの主体となる授業へ。教師が「教える」授業から、子供が「学ぶ」授業へ。従来の教育の成果は生かしつつも、新たな指導観・授業観への転換が求められる中で、私たち教師にはどのような役割や能力が必要となるのでしょうか。

令和3年1月中央教育審議会答申『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」では、教師に求められる資質・能力に関して次のように示されています。

○教師が技術の発達や新たなニーズなど学校教育を取り巻く環境の変化を前向きに受け止め、教職生涯を通じて探究心を持ちつつ自律的かつ継続的に新しい知識・技能を学び続け、子供一人一人の学びを最大限に引き出す教師としての役割を果たしている。その際、子供の主体的な学びを支援する伴走者としての能力も備えている。

「子供一人一人の学びを最大限に引き出す」ことについては、これまで述べてきた新たな指導観、授業観への転換による授業づくりの推進が該当します。

では、「教職生涯を通じて学び続ける」や「主体的な学びを支援する伴走者」とは、具体的にどのような姿を指すのでしょうか。

(2) 学び続ける教師とは

教師が「学び続ける」ことは、2つの意味で必要であると考えられます。

第一に、社会が急激に変化する中で、教師が常に最新の知識技能を学び続けていく必要があるということです。変化を前向きに受け止め、探究心を持ちつつ自律的に学ぶ主体的な姿勢が大切です。

第二に、主体的に学び続ける教師の姿そのものが、主体的に学び続ける子供のロールモデルになるということです。子供たちの学び（学習観）の転換にとともに、教師自身の学び（研修観）もまた転換する必要があります。



※図～「NITS 戦略～新たな学びへ～」（NITS）より

学び続ける教師を育成するためには、子供に対してそうであるように、一人一人の教師が安心して、継続的に学びに打ち込める環境を構築するという視点も重要です。その一例として、現在伊達市立伊達小学校および伊達市で取り組んでいる研修について紹介します。

【伊達小学校の研修について】

伊達小学校では、「伊達小学校に通う全ての児童に『資質・能力』を身に付けさせる」を研修目標としています。そのために、教師の授業観の転換を図り、授業の複線化に取り組んでいます。また、学年をベースとした研修組織に加え、伊達市ワンチームプロジェクトや胆振教育局等との連携を深めることで、学び続ける研修が展開されています。

授業の複線化の重要性や、授業観の転換の必要性について、共通理解を図りました。



	校内研修	校外との連携
4月	<ul style="list-style-type: none"> 研修の方向性確認 学年研修 ※通年 師範授業 ← 	<ul style="list-style-type: none"> 伊達市ワンチームプロジェクト ※通年 胆振教育局要請訪問
5月	<ul style="list-style-type: none"> 研修計画の作成 (学年・個人) 	<ul style="list-style-type: none"> 登別市立富岸小学校 授業視察4名派遣
6月	<ul style="list-style-type: none"> 全体研修 ← 	<ul style="list-style-type: none"> 胆振教育局指導主事による講話、質疑応答
7月	<ul style="list-style-type: none"> 校内授業研 ← 	<ul style="list-style-type: none"> 岩手大学 佐藤准教授による講演
8月		
9月	<ul style="list-style-type: none"> 全学級校内授業公開 (~10月末) 	
10月	<ul style="list-style-type: none"> 公開研指導案作成 ← 	<ul style="list-style-type: none"> たんコミ!の活用 道外視察研修1名派遣 (埼玉大学教育学部附属小)
11月	<ul style="list-style-type: none"> 伊達市教育研究会研究発表会(公開研) ← 	<ul style="list-style-type: none"> ワンチームプロジェクト、および管内の授業実践紹介
12月		<ul style="list-style-type: none"> 道外視察研修2名派遣 (秋田大学教育文化学部附属小)
1月	<ul style="list-style-type: none"> 学校公開 	
2月	<ul style="list-style-type: none"> 研修の振り返り 	
3月		

胆振教育局義務教育指導班主査を講師に招き、授業の複線化に関する質問や悩みについてお答えいただきました。



胆振教育局指導主事より、翌月に実施する公開研の指導案について指導・助言をいただきました。



伊達市教育研究会研究発表会の中で、伊達市ワンチームプロジェクト、および登別市立富岸小学校の複線型の授業実践について、担当者を招き説明していただきました。



伊達市ワンチーム PJ(プロジェクト)とは～伊達市の小学校の研修担当者が集まり、各校の研修の取組の成果や課題について共有します。共有した内容を自校の研修に生かしたり、他校の取組として情報提供したりします。

(3) 主体的な学びを支援する伴走者へ

教師が「教える」授業から、子供が「学ぶ」授業へ。授業観の転換にともない、教師が授業で果たす役割もまた変わっていきます。

ティーチング

自分もっている知識や経験等を相手に教える手法です。学校教育においては、体系化された知識や技能を児童生徒にしっかり定着させることを目的としています。また、ティーチングは、教える側（教師）から教えられる側（児童生徒）への一方的なコミュニケーションになることが多くなるという特徴があります。

コーチング

コーチングは、もともとスポーツの歴史から始まったとされていますが、最近ではビジネス、教育等の場でもその方法論が取り入れられるようになってきました。学校教育においては、教師と児童生徒間での対話や適切な質問により、答えに辿り着けるよう導く手法となります。双方向のコミュニケーションであり、行う上では教師の「傾聴」「質問」「承認」のスキルが重要となります。

ファシリテーション（能力）

ファシリテーションには、行動や過程などを促進する、容易にする、助長するという意味があります。学校教育においては、具体的に次のようなものが考えられます。

○児童生徒がどのような学習をするのか、授業をデザインする。

◆学習計画や授業の流れを共有する。

◆学ぶ意欲を喚起したり、選択したりできる教材・教具を準備する。など

○児童生徒の学習の様子をよく観察する。

◆一人一人が安心して対話できる場、環境をつくる。

◆話を傾聴したり、問いかけたりすることで、考えを整理させる。

◆学習の様子をよく見取り、適宜声掛けをする。（悩んでいる児童生徒に対して・学び合いを深めるために・学習を促進するために…） など

従来の日本型学校教育で用いられた手法は圧倒的に「ティーチング」です。自立した学習者を育てるこれからの学校教育においては、「コーチング」「ファシリテーション」といった手法がより重要になってきます。学びの伴走者としての役割や能力が今、より強く教師に求められています。

Ⅲ 今後の方向性

◆今年度の研究を振り返って

今年度は、研究主題「一人一人の子供を主語にする授業づくり」1年次として、そうした授業が求められる背景や、教師主導から子供主体とする授業改革の具体、教師に求められる資質・能力についてまとめてきました。

今年度の成果と課題には、次の点が挙げられます。

<成果>

- 子供を主語にした授業づくりが求められる背景や、授業の具体について情報を提供することができた。
- 授業観・指導観とともに、研修観の転換の必要性についても発信することができた。
- 次年度以降の方向性を示し、研究の道筋をつけることができた。

<課題>

- 授業の複線化にともなう新たな学習方法については、今現在も全国で研究・実践が進められており、その定義については完全に確立されているわけではない。胆振教育研究所としては今後も最新情報の把握と、役立つ情報提供に努めていきたい。
- 複線型授業の授業展開や、「評価」方法について、具体例を提示していく必要がある。
- 1単位時間だけでなく、単元を通した授業づくりについても研究を深めていく必要がある。(単元デザイン)

次年度以降については、この課題に対し、胆振管内の各学校での実践例を交えながら、一人一人の子供を主語にする授業づくりについて研究を深めていきます。

◆参考資料

- 小学校学習指導要領・中学校学習指導要領
- 中央教育審議会「令和の日本型学校教育」の構築を目指して（答申）
- 中央教育審議会 次期教育振興基本計画について（答申）
- 奈須正裕・伏木久始『個別最適な学び』と『協働的な学び』の一体的な充実を目指して（2023年 北大路書房）
- 中田正弘・坂田哲人・町支大祐「学習者主体の『学びの質』を保証する」（2023年 東洋館出版社）
- 小学校教員のための教育情報メディア「みんなの教育技術」（小学館ホームページ）
- 教育情報誌 学びのチカラ e-na!! vol.3 2022年9月号（教育出版）
- 所報 たまじむ 第85号（令和4年2月16日 東京都多摩教育事務所）
- 第4期 教育振興基本計画
- 初等教育資料・中等教育資料（東洋館出版社）
- 日本ユネスコ国内委員会 持続可能な開発のための教育(ESD) 推進の手引
- デジタル庁・総務省・文部科学省・経済産業省 教育データ利活用ロードマップ
- 奈須正裕「個別最適な学びと協働的な学び」（2021年 東洋館出版社）
- 文部科学省 今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開（令和4年3月）
- 岡山県教育委員会ホームページ

◆研究・執筆

役職名	氏名	所属学校	職名
所長	佐藤 淳	伊達市立東小学校	校長
副所長	横山 康彦	登別市立鷺別中学校	校長
事務局長	高橋 賢治	登別市立鷺別小学校	主幹教諭
事務局次長	黒川 知恵	白老町立白老小学校	主幹教諭
所員	白井 賢司	伊達市立伊達中学校	主幹教諭
所員	渡辺 隆之	伊達市立伊達小学校	主幹教諭
所員	永井 久	登別市立緑陽中学校	主幹教諭
所員	藤田 佳嗣	伊達市立光陵中学校	教諭
所員	甲谷 健	伊達市立東小学校	教諭
所員	中村 章人	登別市立登別小学校	教諭
事務職員	水留 恵美子	胆振教育研究所	

◆あとかぎ

本書では、「一人一人の子供を主語にする授業づくり」をテーマに、教育理論を通じて、個々の子供が自分のペースで学び、成長できる授業のあり方について考察しました。教育において重要なのは、子供たち一人一人の特性やニーズを理解し、それに応じた学びの機会を提供することです。これからの教育は、すべての子供が自分自身の学びに責任を持ちながら、他者と協力し合い、共に成長する場であるべきだと考えます。理論的には、個別化された学びや多様性を尊重することが、子供たちの自己肯定感や学びの意欲を引き出す鍵となります。本書が、教育に携わるすべてのの方々にとって、子供たちの可能性を広げるための一助となり、より良い教育の実現に向けた一歩となれば幸いです。

上記の文章は、今話題の生成 AI が作成したものです。「研究テーマが『一人一人の子供を主語にする授業づくり』の教育理論研究のあとかぎを作成したいです」「300 字程度でお願いします」「やわらかい表現で」といった指示を与えたところ、わずか3分程度で仕上げてくださいました。本書の執筆にあたりこの1年、膨大な時間と労力を注いできた者としては複雑な思いもありますが、その技術の進化には驚かされるばかりです。ちなみに生成 AI は、文章だけでなく、使用者が求める画像や音声、動画といった多様なコンテンツも、わずかな時間で生み出してくれます。まだ試したことのない方は、ぜひ一度体験してみてください。(学校現場で使用する場合は、文部科学省「初等中等教育段階における生成 AI の利活用に関するガイドライン」を守り、著作権や個人情報の漏洩等に気を付けてください)

生成 AI は今後、教職員の校務や児童生徒の学習活動など、教育の場でも急速に普及していくことが想定されます。AI にどのような指示を出せば望む成果を得られるのか、また、AI が提供する情報をどのように解釈して活用するのか。答えや情報が容易に手に入る時代において、教育に求められるのは、単なる知識の習得ではなく、最適解や納得解を探究し続ける姿勢と、それを支える資質・能力を育むことではないでしょうか。

そのためには、本書で述べてきた、子供が学びの主体となり、子供自らが学ぶ、「一人一人の子供を主語にする授業づくり」が何より重要と考えます。胆振教育研究所では、次年度以降もこの研究主題に対して、より具体的な取組や実践事例などを整理し、引き続き発信してまいります。これからも、子供たちの未来のために、共に学び、共に歩んでいきましょう。

胆振教育研究所 所員 渡辺 隆之

令和6年度 研究紀要 第244号
《研究主題》
一人一人の子供を主語にする授業づくり
～1年次～

発行年月日 令和7年3月3日
発行 胆振教育研究所
代表者 所長 佐藤 淳
印刷 (有)村上印刷

